



手紙の力

鈴木おさむ

僕は今まで人に頂いた手紙を取ってあります。メールと違って、手紙は歳を取ります。年月を経て見てみると、文字の色も手紙の色も変わってくる。

僕は四十歳過ぎたあたりからそれまで以上に書くようになりました。

松岡修造さんとお仕事をさせていただいた時に、その二日後くらいに直筆で感謝の言葉が書かれた葉書が届きました。その機動力と美学に痺れました。

僕の周りの出来る人達というのは、手紙を書きません。僕もそんな大人になりたいなどと、手紙を書くようになったのです。書きやすい筆ペンや万年筆なども覚ええました。季節ごとに違う模様の入った紙や封筒を選んだり。そんなことが楽しくなりました。

僕は結婚前、付き合っていた女性へ

の誕生日プレゼントは、一緒に買い物に行き好きなものを選んでもらっていました。それが一番いいだろうと思っていた。

三十歳で妻と結婚して、初めてのクリスマスに妻は僕が欲しいと思っていた洋服をくれました。なので僕が「プレゼントを一緒に買いに行こう」と言ったら「いらない」と言われました。

妻は「プレゼントって貰う方も嬉しいんだけど、その前に、あげる方が相手のことを沢山考えて『これをあげたら喜ぶかな』と想像したりする。その時間が楽しいんじゃないかな」と言うのです。人生でとても大切なことを放棄して生きてきた自分に恥ずかしくなりました。そこから、プレゼントの仕方を変えました。その人のことを考えてプレゼントを選ぶ。

手紙もこれと似ている気がします。書いているときにどんな言葉を選んで、どんな風に書くのか？ この手紙を読んでいる時の相手の顔を想像する。まずそれが楽しい。贅沢な時間。

今回、このコラムを書くにあたり机の中にしまっている手紙を取り出し、見ました。歳を取った手紙たち。

そして一つの手紙が目に入りました。

十年ほど前。長野県に住む三十歳の女性から突然届いた手紙。自分は結婚して小さい子供がいること。そして進行性の胃腸になってしまったこと。先が短いこと。だから、自分の姿を映像に残せないかという直筆の手紙。

僕がその時にやっている番組ではどうすることも出来なかった。だから自分出来ることをやろうと思い、一人でデジカムを持ち、長野県の山奥に行きました。その女性に僕がインタビューをしました。そして、その映像をDVDに焼いて、送らせていただきました。後日、親族の方から熱い感謝の手紙を頂きました。

あの時、手紙が届いたから、僕は一人で行動に出た。手紙に書かれた文字からは感情が伝わる。

あの時の手紙はこれからも僕の机の中で歳を重ねていくでしょう。

これからもずっと手紙を楽しんで生きたい。

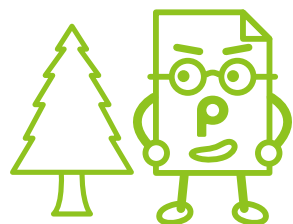


すずき・おさむ●1972年千葉県生まれ。高校時代に放送作家を志し、19歳でデビュー。バラエティーを中心に多くのヒット番組の構成を担当。映画・ドラマの脚本や舞台の作演出、小説の執筆等さまざまなジャンルで活躍。最新刊に原作を担当した漫画『ティラノ部長』（マガジンハウス）、男性不妊をテーマとした小説『僕の種がない』（幻冬舎）などがある。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



〈8年で成木となる樹種の植林例〉



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/) <http://kamitsubu.com/>

今回は12/30・2022/1/6 合併号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo:Shiro Miyake